

中学校 英語

英語を書く活動における自己表現力を高めるための指導法の工夫
—自分の考えや気持ちをより分かりやすい言葉に言い換える活動を通して—

藤崎町立明德中学校 教諭 田中 雅人

要 旨

本研究は、英語を書く活動において、自己表現力を高める指導の在り方を探ったものである。自由英作文を書く際に、書きたい内容を日本語でより分かりやすい言葉に言い換える活動を指導の中に取り入れた。その結果、自由英作文の語数と文数が増え、生徒は文と文のもつ論理的なつながりを意識して自由英作文を書くようになった。また、日本語と英語の語順の違いに難しさを感じる生徒や、日本語を英語でどのように書けばよいのか分からないと感じる生徒が減少した。

キーワード：中学校 英語 書くこと 自由英作文 日本語 言い換え

I 主題設定の理由

中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」の中で、中学校外国語における「改善の具体的事項」の一つとして、「自分の考えや気持ちなどを読み手に正しく伝えられるよう、内容的にまとまりのある一貫した文章を書けるように、指導の充実を図る」と示している。つまり、「書くこと」における言語活動では、言語材料についての知識や理解を深めるための言語活動で終始せず、自分の考えや気持ちなどを伝え合う言語活動へ発展させることが求められているといえる。

4技能の中の「話すこと」では、自分の考えや気持ちを音声で相手に伝えることの他に、ジェスチャーや表情といったノンバーバル・コミュニケーションを用いながら意思疎通を図ることもできる。一方、「書くこと」では、読み手は書かれた文字から相手の考えや気持ちや事実を読み取るしか手段がなく、書く側には「話すこと」よりも文としての正確さが強く求められる。

そのため、これまでも自身の授業において、自分の考えや気持ちを英語で表現させる自己表現活動は多く行ってきた。しかし、生徒はいざ英語で書こうとすると、書けなかったり、誤文を書いたりすることが多くあった。また、定期テストなどでの自由英作文では、無答も多く見られた。その主な理由としては、自分の考えを英語で書く際に既習事項のみでは表現しきれない箇所があり無理が生じていたこと、日本語でうまく考えをまとめられずにいたことの二つが考えられる。

そこで、「書くこと」の指導において、自分の書きたいことを考えさせ、それをより分かりやすい言葉に言い換える活動などを授業の中に取り入れることにした。これにより、自分の考えや気持ちを英語で書くことへの抵抗感が少なくなり、また誤文も減らすことができるであろうと考えた。

II 研究目標

自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動において、生徒の自己表現力を高めるためには、書きたい内容を日本語でまとめる段階で、より分かりやすい言葉に言い換える活動を取り入れることが有効であることを明らかにする。

III 研究仮説

自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動において、書きたい内容を日本語でより分かりやすい言葉に言い換える活動を指導の中に取り入れることにより、生徒は英語を書くことへの抵抗感を少なくでき、正しい英語で自己表現をできるようになるであろう。

IV 研究の実際とその考察

1 研究内容

(1) これまでの授業の反省と指導上の工夫

前述の中央教育審議会による答申を受けて、中学校学習指導要領（平成20年3月告示，以下新学習指導要領とする）では、「第2章 第9節 外国語」の「第2 各言語の目標及び内容等」の「1 目標」において、「(4) 英語で書くことに慣れ親しみ，初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」と示されている。また，同じく「2 内容」の「(1) 言語活動」の「エ 書くこと」では，「(エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて，自分の考えや気持ちなどを書くこと」，また「(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように，文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」と示されている。つまり，「書くこと」においては，与えられた単語を単に書き写したり言語材料についての知識や理解を深めるための言語活動を行ったりすることに終始せず，自分の考えや気持ちなどを表現するためにこれまで蓄積した言語材料を活用する言語活動へと発展させることが求められているのである。

これまでの自身の授業において，自分の考えや気持ちなどを書く言語活動では，①生徒にテーマを与える，②テーマに対する自分の考えや気持ちなどを日本語で文章にさせる，③日本語の文章を英語で書かせる，という手順を取っていた。しかし，自分の書きたいことを既習の表現を用いて書くことのできる生徒は少なかった。その理由は前述したとおりであるが，これまでの自身の授業をより深く振り返ってみると以下の理由があったのではないかと考えた。

- ・自分の書きたいことを英語で書く際に，既習事項のみでは表現しきれない場合があるために，生徒は英語で表現したくてもできないジレンマを抱えている。
- ・文構造の知識が不十分であるため，書いた英語の語順や語法が適切でない。
- ・日本語で書きたい内容をまとめられない。そのため，英語で何を書いてよいのか，また何から書き出してよいのか分からない。

これまでの自身の実践では，「書くこと」の指導の中で，言語材料についての知識や，理解を深めるための言語活動の比重が重く，考えや気持ちなどを伝え合う言語活動に発展させるための手だてが少ないことに気付いた。また，日本語で文章を書かせるというステップはあるものの，英語で書く段階で生徒が英語で書けずに悩んでいることも痛感していた。中学校の英語において「書くこと」の指導の際に重要なこととして，小菅は「いきなり，「自分の考えを自由に書いてみましょう」では指導にならない。生徒が戸惑うだけである」と指摘している（小菅和也，2010）。さらに，小菅は，まとまりのある文章を書かせるプロセスとして，アイデアを書き出す，アウトラインを作る，下書きを作成する，推敲するといったプロセスを踏む必要があると指摘している。小菅の指摘と自分のこれまでの指導方法を照らし合わせると，日本語の段階でより分かりやすい言葉に言い換える活動を行うことが生徒の自己表現力を伸ばす上で有効であると考え，自由英作文の指導計画を見直すこととした。

前述したとおり，新学習指導要領では，「書くこと」において，これまで蓄積した言語材料を活用する言語活動へと発展させることが求められている。また中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年9月）では「自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力，内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視する」ということが求められている。本研究で自由英作文を題材として取り上げたのは，自由英作文を書く際には生徒が自分の考えや気持ちをこれまで身に付けた言語材料を活用しながら書くことになり，「書くこと」において新学習指導要領で求められている力を生徒に付けるために有効であると考えたためである。

(2) 検証授業の実践

そこで，これまでの自身の授業における反省点を踏まえて，また前述の小菅の指摘を基にして，以下のことを念頭に置き，自由英作文の指導計画を立てることとした。

- ・テーマから連想される言葉を書き出し，それに関連する言葉を書き出して線でつなげていくマッピングを活用し，日本語で文章にする前に，自分の考えを整理させる。
- ・分かりやすい日本語になるように，長い日本語の文は，短い複数の日本語の文にするなどの工夫をさせる。
- ・それぞれのテーマで使えるような接続詞が扱われている教科書の基本文をモデルとして生徒に提示する。
- ・次の授業で，生徒が書いた自由英作文の中に共通して見られたエラーを生徒全員に示し，解説する。

・次の授業で、生徒が書いた自由英作文の良い例を全員に読ませ、その際、日本語での言い換えや接続詞に着目させる。

日本語で書く段階で、接続詞が扱われている教科書の基本文をモデルとして提示したり、次の授業で他の生徒が書いた自由英作文の中の接続詞に着目させたりしたのは、「内容的にまとまりのある一貫した文章」を書くためには「文と文のつながり」に注意する必要がある、その際に文と文をつなぐ接続詞を使用することが効果的であると考えたからである。

検証授業の期間である8月から10月にかけて、2週間に1時間の割合で計5時間、表1に示すテーマを生徒に与え、自由英作文を書く活動を取り入れた。各時間の指導については、表2のような流れで行った。

2 検証の方法

自分の考えや気持ちを英語で書く力の変化を、1時間目、3時間目、5時間目に生徒が書いた自由英作文の量と質の両面から分析した。なお、本研究

での自由英作文の量とは、語数と文数を指す。また自由英作文の質とは、内容的なまとまりや一貫性のことであり、本研究では接続詞の数と論理性、エラー率を分析の対象とした。なお、2時間目と4時間目の自由英作文の指導については、それぞれ1時間目、3時間目の復習の時間と位置付け、前の時間の自由英作文で多く見られたエラーを再度解説したり、前の時間の模範的な自由英作文を全員にもう一度読ませたりしてから自由英作文を行った。また、1、3、5時間目に比べ、それぞれの授業の中で自由英作文にかけた時間が短かったため、2時間目と4時間目の自由英作文については分析の対象から除外した。

また、検証授業の事前と事後に生徒の意識調査を行い、その変容を見ることとした。

なお、学年全体の60名のうち欠席等で自由英作文のデータを取得することができなかった2名を除外し、58名の変化を見ることとした。

(1) 自由英作文の量の測定

自由英作文の量を測定するために、語数と文数それぞれの変化を比較した。その際、短縮形は短縮していないものとして2語で数えた。また、and, but, when, because等の接続詞を用いている場合は、その前後を分けてそれぞれ1文として数えた。下はその例である。

We did our best, but we couldn't win the baseball game. (語数12, 文数2)

(2) 自由英作文の質の測定

自由英作文の質を測定するために接続詞数、論理性、エラー率を測定した。

論理性とは、文と文の論理的なつながりのことである。接続詞を用いるなどして複数の文につながりをもたせているものをA、Aと比較して文と文の論理的なつながりが弱いものをB、同じような文の羅列や意味が不明確なものをCとして、三つの群に分けた。表3はその具体例である。

エラー率は、(エラーの箇所数) ÷ (語数) で測ることとした。①三人称単数現在形のsの欠落、②主語と動詞の不一致、③上記以外の動詞の誤り、④前置詞の欠落や不適切な使用、⑤語順に関する誤り、⑥意味的にふさわしくない単語をエラーとして扱った。表4はこれらの例である。綴り字や大文字小文字の間違いといった単純な表記

表1 検証授業での自由英作文のテーマ

1時間目	修学旅行について、思い出に残っていることを書きなさい。
2時間目	遠足について、どこへ行ったのか、また何をしたのかを説明する文を書きなさい。
3時間目	行ってみたい場所はどこか、そこで何をしたいか書きなさい。
4時間目	文化祭について、自分の役割や思い出に残っていることを書きなさい。
5時間目	あなたは給食と弁当どちらが好きですか。理由も含めて書きなさい。

表2 自由英作文の1時間の指導の流れ

段階	指導の内容
1	自由英作文のテーマから思いつくキーワードを、日本語でマッピングをさせる。
2	マッピングを基に、自分の書きたいことを整理し、日本語で文章にさせる。
3	日本語の文章を英語で書きやすいように言い換えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・主語を明確にさせる。 ・接続詞が扱われている教科書の基本文をモデルとして示す。 ・主語と動詞が対応しているか確認させる。 ・書きたいことを既習の表現を用いて書くことが可能か確認させ、必要に応じて別な日本語に言い換えをさせる。 ・英語で書きやすいように、それぞれの日本語の文を短くさせる。 ・どうしても英語で表現することが難しい部分は削除させる。
4	言い換えた日本語を、英語で書かせる。

表3 論理性の例

	生徒が書いた自由英作文 (原文のまま)
論理性 A	I watched a professional baseball game in Tokyo. My favorite team won the game, so I was very happy. The game became my best memory.
論理性 B	My best memory of my school trip is walking around many towns in Tokyo. I went to Ueno and Odaiba by train.
論理性 C	I went to Ueno. I went to Akihabara, too. I went to Odaiba, too.

上の誤り、名詞の単数形と複数形の誤り、冠詞の欠落や誤った使用、未指導の単語を使用した箇所についての誤りについてはエラーとして扱わなかった。

表4 エラーの例

I goed on a trip with my friends in May. My friend, Ken like anime, so we went to Akihabara. We walked around Akihabara Station. There were many game shops. I am good in playing video games, so I played some video games. Playing video games in Tokyo made happy me . All of the games were funny . The trip enjoyed.	
文中のエラーとその種類	ゴシック体はエラーの箇所
①三人称単数現在形のsの欠落 like	②主語と動詞の不一致 The trip enjoyed.
③上記以外の動詞の誤り goed	④前置詞の欠落や不適切な使用 in
⑤語順に関する誤り happy me	⑥意味的にふさわしくない単語 funny

3 考察

(1) 自由英作文に対する意識の変化

事前の意識調査で、「自由英作文は好きですか」という質問に対し、

「どちらかといえば好きではない」又は「嫌いだ」と答えた生徒は58名中44名であった。この44名を対象にしてその理由を調査したところ、結果は表5の通りであった。また、この44名に、事後の意識調査で自由英作文における意識を調査したところ、結果は表6の通りであった。

事前と事後それぞれの質問項目ウに着目すると、事前の意識調査では英語の語順に対して苦手意識をもつ生徒が33名であり、全体の4分の3に上っていた。これに対して、事後の意識調査では、英語の語順に対して24名の生徒が苦手意識が改善されてきたと回答しており、その数は過半数に達している。

また、事前と事後の意識調査それぞれの質問項目エにも着目した。書きたいことをどのように英語で書けばよいか分からないという生徒は、事前の意識調査では40名であり、多数を占めていた。一方、事後の意識調査では、18名の生徒がこのことに対して苦手意識が改善されてきたと回答した。

つまり、英語の語順に対してと英語での書き方に対しては、苦手意識が改善されてきていると考えられる。

何度も自由英作文を書く中で日本語と英語の語順の違いがおのずと意識されたこと、また英語で書きやすいように日本語を言い換える作業を行ったため既習の表現を使用しやすくなったことが要因として考えられる。

(2) 自己表現力の変化

生徒の自由英作文の量と質の変化を見るために、1時間目、3時間目、5時間目の授業での自由英作文を前述した方法により測定した。

なお、自由英作文の論理性については、論理性Aのものを3点、論理性Bのものを2点、論理性Cのものを1点として分析をした。

その結果を、各項目それぞれについて、自由英作文の回数を経るに従って変化が見られるかという観点で、分散分析で分析をした。

分析の結果から、語数、文数、接続詞数、論理性の4項目で統計的有意差が出ていることが分かった。詳細は表7に示す通りである。さらに、有意差が認められたこれら4つの項目については、それぞれライアン法を用いて下位検定を行った。その結果は表8に示す通りである。

語数、文数、論理性については、5時間目の結果が1時間目、3時間目に比べて有意差が見られた。また、接続詞数については、回を追うごとに有意に接続詞数が増えていったことが分かった。

語数と文数が増えたこと、すなわち自由英作文の量の増加については、その要因として、生徒がマッピ

表5 自由英作文が苦手である理由(44名中)

	自由英作文が嫌いな理由	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
ア	何を書けばよいか(日本語で)思い浮かばないから	12名	8名	13名	11名
イ	書いても点数がなかなか取れないから	7名	14名	16名	7名
ウ	英語の語順が分からないから	18名	15名	8名	3名
エ	書きたいことはあるけれども、どのように英語で書けばよいか分からないから	32名	8名	3名	1名
オ	なかなか指定の語数(20語以上など)に到達できないから	10名	14名	8名	12名

表6 自由英作文が苦手である生徒の事後意識調査の結果(44名中)

	自由英作文の授業を終えての意識の変化	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
ア	以前よりも書きたいことが(日本語で)思い浮かぶようになってきた	5名	23名	11名	5名
イ	以前よりもテストの自由英作文で点数が取れるような気がしてきた	4名	12名	17名	11名
ウ	以前よりも英語の語順が分かるような気がしてきた	5名	19名	15名	5名
エ	以前よりも書きたいことを、どのように英語で書けばよいか分かってきた	3名	15名	20名	6名
オ	以前よりも指定の語数(20語以上など)に到達できるようになった	5名	15名	12名	12名

表7 自由英作文(対象58名)の変化

	1時間目	3時間目	5時間目	F値	p値
平均の語数	14.41語	16.43語	20.81語	F=11.79	p<.001
平均の文数	2.60文	2.43文	3.10文	F= 5.36	p<.01
平均の接続詞数	0.12個	0.72個	1.36個	F=59.77	p<.001
論理性の平均点	1.83点	1.79点	2.21点	F=11.66	p<.001
平均のエラー率	0.03	0.03	0.05	有意差なし	有意差なし

ングをして日本語で書く内容を整理したことや、日本語を分かりやすい言葉に言い換える活動をしたことが考えられる。

つまり、これらの活動によって、既習事項を用いて英語で表現できる幅が広がったものとする。このことは、前述した意識調査において、英語での書き方の項目で生徒の意識が前向きになってきていることからもうかがえる。

自由英作文の質が向上した理由としては、以下の二つが考えられる。

すなわち、①日本語でまとめる段階で、接続詞が扱われている教科書の基本文を生徒に示したこと、②次の授業で他の生徒が書いた模範的な自由英作文の中で使われている接続詞に注目させたことである。

これらにより、生徒は自由英作文の中で接続詞を安心して使用できるようになり、接続詞を用いた文を書く機会が増え、複数の文の論理的なつながりを意識して自由英作文を書くことができるようになったと考えられる。

なお、書きたい内容を日本語でまとめる段階で、主語をはっきりとさせたこと、主語と動詞を対応させたこと、意識して日本語の文を短くさせたことは、英語に苦手意識をもつ生徒にとっても必要最低限レベルの自由英作文を書く手だての一つになったと考える。

表 8 下位検定の結果

組合せ	語数	文数	接続詞数	論理性
1時間目と5時間目	t=4.75, p<.001	t=2.34, p<.05	t=10.93, p<.001	t=3.99, p<.001
3時間目と5時間目	t=3.25, p<.01	t=3.15, p<.01	t= 5.62, p<.001	t=4.35, p<.001
1時間目と3時間目	有意差なし	有意差なし	t= 5.31, p<.001	有意差なし

V 研究のまとめ

1 自由英作文への意識の変化

事前の意識調査で自由英作文に苦手意識をもつ生徒を抽出し、事前・事後の意識調査を比較したところ、日本語と英語の語順の違いに難しさを感じる生徒や、日本語を英語でどのように書けばよいのかが分からないと感じている生徒が減少した。自由英作文を書く中で、日本語と英語の語順の違いがおのずと意識されたことや、英語で書きやすいように日本語を言い換えたことにより既習の表現を応用しやすくなったことがその要因として考えられる。

2 自己表現力の向上

自由英作文の語数、文数、接続詞数、論理性の4項目で統計的有意差が見られた。語数と文数が増えたことについては、マッピングをして書く内容を整理したこと、日本語の文を英語で書きやすいように言い換える活動をしたことが主な要因として考えられる。また、日本語でまとめる段階で接続詞が扱われている教科書の基本文をモデルとして生徒に示したことにより、接続詞数が増えたものとする。接続詞を用いた文を書くことが増えたことにより、生徒は文と文のもつ論理的なつながりを意識できるようになり、論理性が向上したと考えられる。

VI 本研究における課題

検証授業を進める中で、繰り返し同じようなエラーをする生徒が見られた。また、生徒の書いた自由英作文の分析の結果、エラー率の項目では有意差が見られなかった。検証授業の事後に行った意識調査の結果においても、質問項目「以前よりもテストの自由英作文で点数がとれるような気がしてきた」の項目に対して「どちらかといえばそう思う」「そう思う」と答えた生徒は、自由英作文に対して苦手意識をもつ44名の生徒中16名であった。つまり、自由英作文に苦手意識をもつ生徒の中の半数以上である28名は、テストの自由英作文に対して不安を抱えたままだと考えられる。これらのことから、生徒が書いた自由英作文の効果的なフィードバックの在り方を検討していく必要がある。

なぜなら、教師から生徒へ適切にフィードバックを行うことにより、生徒は正確さをより意識して自由英作文を書くことになる。その中で教師によるエラーの指導と合わせて、自由英作文の中のエラーが減少していくものと予想できるからである。これは、自由英作文を書くという言語活動を通じて言語材料の定着を図ることにつながるものである。

さらに、生徒がお互いの自由英作文を読み、それにコメントを付すなど、生徒同士のフィードバックを適切に行うことにより、生徒は一番身近な読み手を意識して自由英作文を書くことになる。これにより、自由

英作文に対する生徒の意欲が高まっていくものと予想できる。

<引用文献>

文部科学省 2008 『中学校学習指導要領（平成20年3月告示）』, p.105 , p.106

小菅和也 2010 「ライティング指導で重要なこと」『英語教育 Vol.59 No.3』, p.12 大修館書店

文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年9月）』, pp.2-3

<引用URL>

中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善
について（答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf (2010.12.28)

<参考文献>

平田和人編 2008 『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』 明治図書

<参考URL>

桐木建始 2004 ANOVA4 on the web

<http://www.hju.ac.jp/~kiriki/anova4> (2010.12.28)